

FICオープンセミナー報告

法政大学, 国際文化学部

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Intercultural Communication / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

228

(終了ページ / End Page)

241

(発行年 / Year)

2019-04-01

「越境とエクソフォニーのいま」

報告者：栗飯原文子＋岩川ありさ

2018年10月31日、ドイツ語と日本語の2言語のあいだで創作を続ける作家・多和田葉子氏を招き、本学部教授で作家のリービ英雄氏との対談を開催した。多和田氏は、エッセイ集『エクソフォニー―母語の外へ出る旅』（岩波現代文庫、2012年。単行本刊行は2003年）の中で、「エクソフォニー」という言葉を「母語の外に出た状態一般」と捉え、新しい文学の見方を提示した。リービ氏は、同書の文庫版の解説を担当しており、今回のセミナーでは、「越境とエクソフォニーのいま」というテーマで、現在、世界の中で起きているアクチュアルな問題と関連させながら、対談が行われた。

リービ氏は、対談の冒頭で、『エクソフォニー』の文庫版で書いた「解説」を引用し、「いくつもの母語が同等に存在する「多民族共生」というだけではなく、「一人の人間が複数の声を持つ」ようになり、「一人一人の中にいろいろな声がある」ことが発見されるような「現代のヴィジョン」を見出した一冊として『エクソフォニー』を紹介した。また、『エクソフォニー』でなされた提起は、多和田氏の最新小説『地球にちりばめられて』（講談社、2018）においても引き継がれていることが示された。多和田氏には、『地球にちりばめられて』についてのお話を伺いながら、多様な響きが聴こえる文学の可能性についてお話しいただいた。

大学院生や学部生のみならず、学外からの参加も含めて合計123名の参加者をえて、質疑応答も活発に行われた。本対談の様子は、文芸誌「すばる」（2019年1月号）にも掲載された。また、大学院国際文化研究科の科目「国際文化研究B」において、学部学生と大学院生との合同授業を2度行い、2019年度から実施される学部生による大学院科目の履修に繋がる試みとして、活気のある交流が行われた。

-
- ・実施日：2018年10月31日（水）18：30-20：30
 - ・会場：法政大学市ヶ谷キャンパス スカイホール
 - ・内容：シンポジウム「越境とエクソフォニーのいま」（多和田葉子氏、リービ英雄氏対談）
-

法政大学 国際文化学部・国際文化研究科
FIC オープンセミナー

シンポジウム

越境とエクソフォニー のいま

多和田葉子氏

リービ英雄氏

対談

10月31日(水) 18.30～(18.00 開場)

法政大学 市ヶ谷キャンパス

ポアソナードタワー26階 スカイホール

多和田葉子(作家)

1993年「犬飼入り」で芥川賞受賞。2003年『容疑者の夜行列車』で谷崎潤一郎賞、伊藤整文学賞受賞。

近著に、『猷町使』(講談社、2014年)、『百年の散歩』(新潮社、2017年)、『地球にちりまられて』(講談社、2018年)。

リービ英雄(作家、法政大学国際文化学部・大学院国際文化研究科教員)

近著に、『模範郷』(集英社、2016年、読売文学賞受賞)、『大陸へ—アメリカと中国の現在を日本語で書く』(岩波書店、2012年)、『仮の水』(講談社、2008年、伊藤整文学賞受賞)、『千々にくだけて』(講談社、2005年、大佛次郎賞受賞)。

＊本イベントは入場無料、申し込み不要です。

お問い合わせ：法政大学国際文化学部 jkokusai@hosei.ac.jp (岩川・粟飯原)

